

# 肺結核症臨牀所見の統計的記載法及び 病症數値賦與法

國立療養所大日向莊 醫學士 大島登輝夫

(本論文の要旨は昭和19年6月豫防會結核研究所研究會にて發表せり)

肺結核症の臨牀統計的研究に於て、その主要所見の簡明なる分類記載法とその病症(重、中、輕)及び轉歸判定の參考たるべく、茲に一試案を發表する。

病症判定の標識としては熱(F)、榮養(G)赤沈(R)、喀痰(S)X線(X)の5をとり、各々にその量(質)的考慮に於て輕より重に従つて0~9級に分類する。更に各級に質(量)的考慮による補正符號を記し、前記の如くF, G, R, S, X, の順に列記する。かくて僅か5ヶの數字を以て、吾々が通常の臨牀統計に求める主要所見を可成の精度に於て極めて簡明に記載表記できるのである。

更に一步進めて各級數(FK, GK, RK, SK, XK)を各々補正せる數値Kiの相加平均を以てその病症度Kとする。 
$$K_n = \frac{\sum K_i}{n}$$

標識の缺くものある時は、それを○と記載する。従つて○級は1°と記載して兩者の混同を防ぐ。

數値Kiは0~10迄とし端數は總て4捨5入する。(舊法はKi 1~9)

第1表 熱階級分類法

FK	最高體溫	日差(符號)	熱	型
1	~36.9	平熱(5'~8')	熱	型
2	~36.9	不定、稽留熱	1,3の中間、月經熱	
3	37.0~37.4	平熱、稽留熱	微	熱
4	~37.4	不定熱、弛張熱	亂波型、其他各種	雜型
5	37.5~38.0	各	型	其他各種
6	38.0~	稽留熱	肋膜炎、シユープ	
7	38.0~	弛張熱	波型、亂雜型、其他	
8	38.0~	消耗熱(1.05~2.0)	逆轉熱	
9	38.0~	消耗熱		

符號。平均5、概算(凡そ)5、補正、加算

5'=6、9'=10、9''=10、減算 5=4、1=0、  
1=0、弱(小)意符號 5=5(強(大)符號 5'=5)

## 1、熱階級(FK) 第1表參照

熱型は概ね1ヶ月間の経過により判定する。下熱劑はそれが有効なる限り補正する 3'=4 檢溫回數が1日3回以下のときは概算符號3

## 2、榮養階級(GK)

$$GK = \frac{\text{身長 cm} - 100 - \text{體重 kg}}{3}$$

補正 身長 < 149cm = GK''

〃 < 159cm = GK'

〃 < 169cm = GK°

〃 > 170cm = GK

參考、水平に伸展せる兩手中指先端間の長さは略身長に等しい。

外見榮養狀態による時は良=1、可=2、輕減5、劣=7、著減=9

## 3、赤沈階級(RK)

$$RK = \frac{\text{W氏法 1時間値}}{10}$$

補正、1時間値 > 100耗 = 9'

2時間値 > 3 × 1時間値(5耗以上) = RK'

赤沈値は溫度補正をせずとも可、體重の季節的變動と概ね相殺せん。

## 4、喀痰階級(SK) 第2表參照

第2表 喀痰階級

一 日 喀 痰 量	培 養 (-)	集 菌 (-)	Gaf (-)	G I~III	G IV~V	G VI~X
±	1 <sup>=</sup>	1 <sup>-</sup>	1	1'	1''	1'''
~4ヶ	2 <sup>=</sup>	2 <sup>-</sup>	2	2'	2''	2'''
~9ヶ	3 <sup>=</sup>	3 <sup>-</sup>	3	3'	3''	3'''
10 <sub>cc</sub> (5~14 <sub>cc</sub> )	4 <sup>=</sup>	4 <sup>-</sup>	4	4'	4''	4'''

喀痰量1日 10<sub>cc</sub> 以上は

$$SK = \frac{\text{喀痰量}_{cc}}{10} \text{ 又は } \frac{\text{喀痰個數}_{\times}}{20} \times 1_{cc} = 2_{\times}$$

5、X線階級(XK)第3、4表

XK=X線像 10進分類法(DX)の百位數。

補正、II DX4位數 1(型)=XK, 3(型)=XK°,

5(型)=XK', 7(型)=XK''

以上5標識の記載法

$$DK5'3.44''7'''_{\vee} = 5.6 \text{ 或は } K5.6 = 5'3.44''7'''$$

6、X線像 10進分類法(DX)第3,4,5,表 5, の數字を組合せX線像の簡明なる記載を期する。即ち萬位(病期等)千位(性状)百位(擴り)拾倍(部位)一位(補足)とす、各々を1~9に分類し、分類不能の項目は○と記載する。

第3表 DX分類法類圖表 (萬位、千位)

類	目	X線像	
I	00	正 常	ツ反陰性
	(10)	正 常	
I 初期變化群	11	石灰化癭	
	13	初感原發癭	
	15	双極像	
	17	初期浸潤	
	(19)	異常なし (所謂肺紋著變なし 理増強等)	ツ反陽轉
II 肺門結核	21	所謂肺門硬變	
	23	肺門淋巴腺腫脹	
	25		
	27	所謂肺門浸潤	
	(29)	エヒツベルクローセ	
	(30)	急性粟粒結核症	
III	31	所謂血行撒布性・細目はV類に同じ	左右對稱播種
	33		
	35		
	37		
	(39)	肺尖結核症	
	(40)	所謂早期浸潤	
IV	41	所謂浸潤性(管内性)細目は類Vに同じ	
	43		
	45		
	47		
	(49)	大葉性乾酪性肺炎	
	(50)	氣管支肺炎型	
(V) 混合(不明)性	51	硬化狀(1型石灰化)	3型は空洞(-)
	53	斑點狀(3型増殖結節)	空洞(+のもの
	55	混合狀(5型移行複雑)	は5型とす。
	57	雲 狀(7型滲出)	
	(59)	上葉炎	
	(60)	縦、隔竇葉間)肋膜炎	

VI 肋膜炎	61	輕度癒著	
	63	肺脈形成	
	65		
	67	滲出性肋膜炎	
	(69)	後肋膜炎性肺結核	(Neumann)
	(70)	氣胸性肋膜炎(膿胸)	
VII VIII IX		人工氣胸	
		肺結核外肺疾患	

( ) は特殊型にして他の目と重複する。

第4表 病影の擴り(百位數)

	病度	病影
A(限局性)	1	片肺 1/4~1/3 以下(濃度を考慮す)
	2	片肺 1/2~2/3 以下(前同)
B(片側性)	3	2度以上
	4	空洞像あり、(41,43)、竈門結合4
C(兩側限局性)	5	兩肺各 1/4 以下、兩肺尖5
D(兩側性)	6	各約 1/3 以下、又は3度+1度
	7	空洞像あり(75,76)、竈門結合7
E(全肺野性)	8	6度以上
	9	空洞像あり

第5表 病影の部位(拾位數)

R	I.	部 位	
1	5	上肺野	二肋骨下緣迄
2	6	中 "	四又は五肋骨下緣迄(横隔膜の位置如何)
3	7	下 "	上より以下
4	8	片 "	
4	8	肺 門	必要あらば(萬位數にても判る)
9		兩肺野	兩肺門9
←→↑↓			臟器變位

病影の性状(4位数)を更に細分する必要あらば偶数(2,4,8)並に符號(・)を使用する。又はDXは左右肺別々に記載すれば詳細となる。但し著者は特殊目的以外に統計的にはその必要を認めない。

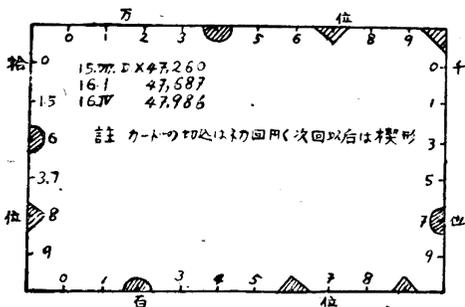
補足的事項(1位)、例へば1=石灰化、2=肺門、3=撒布、4=浸潤、5=複雑(混合)、6=肋膜、7=人工氣胸、8=合併症(手術)、9=特殊型とする。又補足事項が2ヶ以上あれば小数點以下に列記する。其他符號や文字を補記する。

以上DX分類法は暗記容易、記載極めて簡明しかも包括的で他の特定分類法への再分類も可能である。

記載法、DX57.727.6. DX00.210. DXN. DX40

7、整理力カード(古ハガキ利用)第6表

第6表 整理カード



圖の如きカードにより特別の統計機械或は集計者を要せず迅速なる集計が可能である。

8、Kの應用

$K_i$ の單純相加平均値Kが將して理論的に肺結核症の病症判定の基準たりうるや否や、その當否は暫く問はず、實施應用の面を檢討して見よう。

i) 輕快指數Q

$$Q = k / K_1 \times 100 \text{ (増悪 } Q = k / 10 - K_1)$$

$K_1$  (初) -  $K_2$  (終) = k、輕快ケイ。

ii) 南湖院病牀日誌より

昭和12年~17年、在院半年以上の病牀日誌をその記載轉歸につき統計をとつた。舊DK分類法によつた故( $K_i=1\sim 9$ )多少數値に變動あり。

著輕快(35例)  $\bar{K}_1=4.8\pm 1.0$   $\bar{K}_e=26\pm 0.7$

$$Q=46$$

輕快(108例)  $\bar{K}_1=4.7\pm 0.9$   $\bar{K}_e=3.8\pm 1.1$

$$\bar{Q}=19$$

死亡(160例)  $\bar{K}_1=5.9\pm 1.1$   $\bar{K}_e=6.9\pm 1.1$

$$\bar{Q}=-24$$

即病症:  $K < 3.4$  = 輕症、 $K < 5.4$  = 中等症、 $K > 5.5$  = 重症 轉歸:  $Q > 40$  = 著輕快、 $Q > 10$  = 輕快、 $Q < 1101$  = 不變と見なしうる。

即Kは臨牀統計的に病症並に轉歸判定の參考たりうるものと思ふ。

文 献

- 1) 大島登輝夫: 結核研究、第1卷、4號、昭18。